文学の杜

仙台文学館友の会会報

第59号
平成31年3月20日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022(271)3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

20周年記念特別展「井上ひさしの劇列車」

2019年度展示　夏休みは「スズキコージ原画展」

仙台文学館は、2019年3月28日で開館20年を迎えます。この節目の年は、20周年記念特別展「井上ひさしの劇列車」でスタートします。初代館長・井上ひさしは、数多くの戯曲を残しましたが、今回は、『イーハトーボの劇列車』『頭痛肩こり樋口一葉』『人間合格』『太鼓たたいて笛ふいて』『組曲虐殺』など、文学者の生涯を独自の視点で描いた井上評伝劇に焦点を当てます。文学者の生涯と歴史的事項を緻密に調べ上げた、井上ひさしならではの年譜や創作資料、付箋や書き込みがびっしりと付された書籍資料、舞台写真などを展示します。また、展示室には「列車」をイメージした、舞台装置のような造作をしつらえ、それぞれの舞台に思いを馳せながら、展示をご覧いただきます。なお、この展示は、展示替えを行い、Ⅰ期（春）とⅡ期（冬）の二回にわたって開催し、会期中には多彩なゲストを迎えるイベントも予定しています。

夏休み期間には、「こども文学館えほんのひろば」で、圧倒的なパワーを持つ絵画作品で知られる、絵本作家のスズキコージさんの原画展を開催します。『エンソくんきしゃにのる』『ドームがたり』などをはじめとする絵本の原画を展示するほか、絵本『ドームがたり』の共著者である、アーサー・ビナードさんとスズキさんの対談やワークショップなどのイベントも実施します。

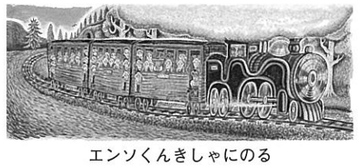
秋の特別展は山形出身の歌人・斎藤茂吉の展示を開催。死後半世紀を経た今日においても多くの読者に親しまれている茂吉短歌の魅力と味わい、そしてその生涯を紹介し、歌人として、人間としての茂吉を紹介します。山形の斎藤茂吉記念館、東京の世田谷文学館の協力を得て、貴重な肉筆資料も公開する予定です。

そのほか、館長・小池光の短歌講座をはじめ、短歌・俳句・川柳の合同吟行会「ことばの祭典」「仙台文学館ゼミナール2019」「仙台朗読祭」「仙台文学館まつり」など、展示以外の事業も例年通りの内容で実施します。

そして、開館20周年の節目に合わせ、常設展示室を一部リニューアルする予定です。震災を巡る表現を紹介するコーナーや、仙台ゆかりの絵本作家・とよたかずひこさんを紹介するコーナーなどを新たに設ける予定です。

節目の20年を迎え、これからまた多くのお客様に関心を寄せていただけるような企画を展開してまいりたいと考えています。これからも仙台文学館をどうぞよろしくお願いいたします。

（学芸室長　赤間亜生）



エンソくんきしゃにのる

仙台文学館2019年度展示予定

◆20周年記念特別展「井上ひさしの劇列車」
　Ⅰ期　4月27日(土)～6月30日(日)
　Ⅱ期　12月14日(土)～4月5日(日)
◆20周年企画夏休みこども文学館えほんのひろば「スズキコージ展」
　7月13日(土)～8月25日(日)
◆特別展「斎藤茂吉展」
　9月14日(土)～11月24日(日)
◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」1月10日(金)～2月11日(火・祝)
＊タイトル、会期は予定です

文友一滴

数年前、友の会役員だった阿部友康さんたちと雑談したときのことだ。私の郷里が下北半島と言うと、阿部さんが言った。

「浅虫温泉の椿館って知っている？棟方志功の作品がいっぱいある宿」

浅虫温泉は上京前の太宰治が通ったということは知っていたが、棟方志功ゆかりの宿があることは知らなかった。私は恥ずかしくなり、いつか行かなければと思った。

昨夏家人と墓参りに帰省する途中、温泉に一泊しようということになり、私は迷わず浅虫温泉の椿館をあげた。ネットですんなり予約がとれたが、この時期空きがあるのは、かなりの老朽旅館だからかと不安になった。

車で着いた浅虫温泉、夕陽の絶景むつ湾に面した大通り沿いには近代的な大型ホテルが建ち並び、昔ながらの旅館は隅に追いやられて見えた。案の定、道案内をたよりにくねくねした細い道を通って椿館にたどりついた。玄関脇のねぶたが目に入ったとき、ねぶた好きの棟方志功御用達の宿だなあと納得。宿帳に記して部屋に向いながら見るロビーの展示コーナー、廊下の壁にも棟方志功が生前この旅館の広間で制作している写真と作品が何枚もかかっていた。ああこれだ、阿部さんが言っていたのはと、わくわくしながら見入った。そうなると売店のオジサンの不愛想さも面白い。老朽化してはいるが、姉妹館がそばに建った由、こんな遺産がある椿館は続くと思った。

阿部さんに会ったら、椿館の話をしたいと思っていたのに、かなわなくなってしまった。

（近）

私と郷土と文学 ⑱

敗れざる者たち

ノンフィクションの分野にスポーツを扱った作品群がある。沢木耕太郎著『敗れざる者たち』（文藝春秋）はその走りといわれ、忘れ難い一冊である。青森出身の田澤拓也著『「延長十八回」終わらず』（文藝春秋）は第五十一回夏の高校野球優勝決定戦を描いたノンフィクション。

昭和四十四年八月十八日、第五十一回夏の全国高校野球決定戦が行われていた。カードは青森代表三沢高校対愛媛代表松山商業。当時、野球後進県の三沢高校が優勝決定戦まで進むとは誰が予想したことだろう。強豪チームに、どこまで食い下がるか、大学生だった私はその日、青森の自宅でテレビの前に釘付けになっていた。

三沢高校が勝ったと思った瞬間は何度かあったが、野球は筋書きのないドラマである。スコアボードはゼロ行進、とうとう延長十八回を戦い引き分ける。翌日再試合となるが、三沢高校のマウンドに立ったのは前日一人で二百六十二球を投げきった太田幸司投手。箸の上げ下げができないほどの疲労に耐え、全力投球でバッターに立ち向かってゆくが、勝利の女神は微笑まず、優勝はかなわなかった。

昨年夏の全国高校野球、百回目を迎えた決勝戦は東北勢初の優勝を目指す秋田代表金足農業高校対強豪大阪桐蔭高校。しかし、またもや東北に優勝旗がもたらされることはなかった。敗れたとはいえ、吉田輝聖投手を軸とした金足農業高校ナインの奮戦振りに、あの半世紀前の三沢高校が蘇り、『「延長十八回」終わらず』の中の「今生きている楽しさに全身で溯れる以外に、人生に何を求めるべきだろう」の言葉が去来した夏だった。

（其田敏美）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

訃報　小岩尚好さん　阿部友康さん

元役員の小岩尚好さんが1月4日に、阿部友康さんが1月15日に逝去されました。

小岩さんには、友の会発足の平成11年から17年まで幹事を、平成18年から21年まで副会長をおつとめいただきました。会の発足にあたり会報発行のご提案をいただき、さまざまな宮城県を中心とした文学の話題を取り上げ、また、会員の声を多く反映した紙面づくりを工夫され、編集を担当してくださいました。

阿部さんには、平成19年から21年まで幹事を、平成22年から27年まで副会長をおつとめいただきました。小岩さんの後を継いで、会報編集をご担当いただき、周年記念の特別号なども手掛けられました。また、積極的に読書会などの新たな友の会行事にも取り組まれ、ご尽力いただきました。

小岩さん、阿部さん、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌

（事務局・伊藤美菜子）

✽映画「この道」は北原白秋の詩にメロディを注ぎ込んだ山田耕作との苦悩を描く。歌は詩の心情を奏でる。心を思い、歌唱を通してこそ人々に強く響く。白秋は、詩そのものに音調があると言う。純真で破天荒な人生から馴染み深い童謡が生まれる。白秋の作詞力に感動すると同時に、家族とともに生きることの困難さを思い知る。感動と勇気を与えてくれる作品。

（豊島光喜）

風と歩こう ⑧

読みかけの本を持って地下鉄に乗る。台原駅下車。日差しを独り占めしている「茉莉花」の像、体の線が柔らかく見える。広い道をどんどん進む。文学館に向かう三叉路には「企画展」のポスターがあった。道しるべの看板には「文学館まで徒歩10分」ホントかな。

「あかまつの道」はちょっとした山道、登ったり下ったり、足下には松ぼっくりが落ちている。立っているもの、寝ているもの、囓られたようなのもあれば、大きさも様々だ。明るい色の大きな松ぼっくりを踏んでみた。クシャッと、でも想像していたよりは重い音がした。赤松の幹が日差しを跳ね返している。山道は意外に明るかった。よく見ると雑木の枝先は膨らみかけている。花芽を抱いている低木もある。深呼吸をすると松のいい香りがした。そこに真冬とは違う落ち葉の匂いが混ざる。円形の踊り場のような所に出た。ここからはズンズン下る。

この道のゴールは、コーヒーとガラス越しの日差しと読みかけの本、幸せな時間だ。

（和）

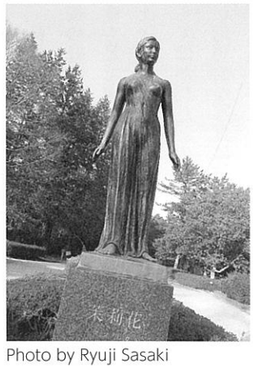


Photo by Ryuji Sasaki

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第59号をお届けします。

▽目的なしの旅がいい。思わぬ出会いがあると事のほか嬉しい。そこで拾ったチラシからまたひとつアシむく先がふえていく。けれど今回目的ありで出かけた。多くの茶道具展をみた。五島美術館、出光美術館、三井記念美術館、国立近代工芸館をゆっくり丁寧に。至福の3日間だった。

（一）

▽運動オンチの私の僻みかもしれないが、最近テレビのスポーツ番組がやたら多くなったと感じる。その結果楽しみにしているBSのドキュメンタリー等が中継等で変更になっていることがあり、がっかりする。2020年東京五輪が過ぎるまで待つしかないのだろうか。

（近）

▽午後3時半過ぎ、エレベーターで下校してきた子供たちと一緒になる。最近まで、彼らは真冬の冷たさと一緒に乗り込んできていた。先日は日向で遊んだらしい匂いを運んできた。コートの前も開けている。そういえば街路樹の足下に緑が少しづつ増え始めた。枝先だって真冬の固い色ではなくなっている。だからかな、光の色が変わってきたようだ。春はもうすぐ。

（和）

▽昨年の秋、八百屋さんの店先で、細かい葉が黄色く縮んで枯れそうな観葉植物の苗木を見つけた。もうダメかと思いつつ痛ましさに買わずにいられなかった。50円。枯葉を取り除き、別のポットに移し替え、肥料をやり、温かい居間に置いたら、年末に緑の葉が繁ってきた。現在、窓辺の素敵なアクセサリー。（佐）

この印刷物は再生紙を使用しています

友の会随想

ハーレーをたのしむ

副会長　寺嶋　信

私の楽しみのひとつにバイクツーリングがある。

バイクへの憧れは、小学1、2年生の頃であった。町で内科医院を開業していた先生が、往診用に大型オートバイ（陸王＝日本製ハーレー）に乗って颯爽と風を切って走る姿を見て、何と大きなオートバイなのかと驚いた。カッコ良いな、将来自分が大人になったらあんな大きなオートバイに跨り、走ってみたいなと憧れていた。16歳になり、軽免許を高校1年生の夏休みに取得し、兄から譲られた250ccのオートバイに乗り通学したのが、バイクとの付き合いの始まりである。その後、4年ほど中断した時期はあるものの、比較的小さなバイクに乗り続けたが、幼少期に憧れた大型オートバイに乗る夢は忘れられなかった。せめてもの思いだけでも、実現しようと、ハーレーダビッドソンのプラモデルを組み立て、それを眺めながら暮らしていた。

定年の3年ほど前になり、もう少し大きな物に乗りたいと考え600ccのスクーターに乗り替えた。妻を後ろに乗せて走るタンデム走行は、以前からやっていたが、大きな排気量による余裕から、より遠くまで走れ、疲れも感じられず、このタンデムでの走行が増えた。もっとサイズが大きくても乗れる自信が湧き、ハーレーを手に入れた。

ハーレーに乗ってからは、バイク仲間とのツーリングが多い。北は北海道から南は九州までのツーリングや、毎年、ハーレーイベントでの、富士スピードウエーに於ける、約1万台の全国からのハーレー仲間の集結と、1千台にも及ぶハーレーによるパレードに参加したことは大きな思い出である。

バイクに乗って良かったと思うことは沢山あるが、その中でも、趣味を通して仲間と知り合え、年齢を問わずいつまでも友人である事。いつまでも乗りたいと思う気持。これらが日々自分の気力の源になり、生きる力を貰っていると実感していることである。

第38回読書会

ヴェトナムにアヘンの白夜を求めて

開高　健「豊満の種子」

新聞社の特派員としてヴェトナム戦争従軍の経験を持つ著者は、何度もヴェトナムを訪れており、ジャーナリストとして現地に知己も多い。その人脈を生かして何度もアヘンに挑戦するのだが、ある時は警察の見張りが有り、ある時はモノが急に手に入らなくなったと断られる。幾度もの徒労の果てにやっと喫うことができた時の状態を著者は「澄明そのものの無窮であった」と表現しているが、一方には、現地の常習者のただならぬ様子も描き出される。

グレアム・グリーンの『インドシナ日記抄』やジャン・コクトーの『阿片』などアヘン体験の作品に触発されたのだろうか、自分もそこに迫らずにいられないという、小説家としての意地と野心が垣間見える体験記であった。

会員からは、「知らない世界を覗き見た」「麻薬の行き着く退廃を知った」「どう読めばよいのかわからない」「単なる興味だけのようで納得できない」「どこまでも傍観者である」「戦争も平和も同じ目線で見ているように感じた」などの感想が出された。

特殊な状況をテーマにしながら、美しい日本語を駆使した詳細な描写が、時に人間の孤独や哀切をも感じさせる作品である。

12月12日、6名出席。（佐）

第39回読書会

せめぎ合う心理、大人の恋

サガン「ブラームスはお好き」

19歳の時『悲しみよこんにちは』で、一躍脚光を浴びたフランスの作家フランソワーズ・サガン20代の頃の作品である。

安泰な結婚生活を自ら捨てて、新しい自分になろうとするポールは39歳の美しい女性である。パリで、浮気がちな中年の恋人ロジェと付き合いながらデザイナーとして生活する彼女の前に、顧客の息子で15歳も年下のシモンが現れる。

ポールとシモン、ポールとロジェ、ロジェと他の女たち、シモンの母親の男性関係など、単なる恋愛の多重性かと思ってしまうが、サガンの小説の面白さは、それではない。恋人がありながら別の人に惹かれる男と女、その揺れ動く心理状態が繰り返し深く掘り下げられていて、読む者の心のひだに反響する。せめぎ合う良心と誘惑、危うさの中に真実はあるのか。恋という不変のテーマにサガンの出す結末は。

サガンを読むのは初めてという人が数人。パリの恋人たちの倦怠感を感じたという感想や、恋だけに終始していて生活臭がなく、現実的でないという意見もいくつか出された。生きる時間の中にあるはずの哀感が見られないのは作者が若い女性だからなのかとの声もあり、20代の頃に読みたかったという人もいた。どの国、どの時代にあっても、恋の波に翻弄される恋人たちの心理は変わらないということか。

フランスの男女は結婚という形を重視していないことや、離婚をしても子どもの養育費が保証されるというフランス事情なども話題となり、作中には出てこない日常の事柄へと話は広がって行った。

2月13日、8名出席。（佐）

次回読書会は4月10日㈬14時
車谷長吉「鹽壺の匙」（新潮文庫）
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

湧き上がる思いに動かされて

友の会文学講座「【3・11の記憶】を語る」開催

2月9日㈯友の会主催の文学講座が開催された。参加者は34人。東日本大震災の犠牲者への黙とうで「佐藤通雅〈短歌〉×佐々木隆二〈写真〉『3・11の記憶』を語る」と題された講座は始まった。

会場の講習室には、震災を詠んだ筆書きの短歌と写真を組み合わせたパネルが24枚、参加者を取り囲むように置かれ、講師が語る作品がすぐそばという絶妙な配置で講座は進んだ。短歌と写真は別々に詠まれ撮られたが、パネル製作に際しては、取材メモを頼りに合わせたという。佐藤氏は歌集を出す準備中だったが、中断して震災詠に集中したとのこと。

昔むがす、埒もねえごどあつたづも昔話となるときよ早来よ

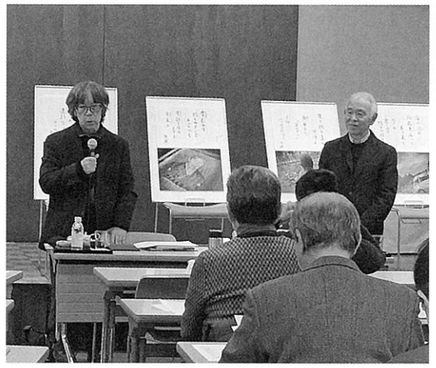
震災の一週間後、電源が止まった中で昔話本来の姿を思って詠んだというこの歌には、和服の老女の写真が合わされている。佐々木氏が閖上で撮ったとき、砂に埋れガラスが砕け歪んだ遺影の老女が語りかけてくるような気がしたという。

裏山へなぜ逃げなかつた　問うて問うて問うてすべなきことをまた問う

卒業制作の壁画銀河鉄道は無数の星をまとひて走る

石巻市大川小学校の震災詠は、その後の経緯から難しさに直面したが、何度も足を運び文学として残したと佐藤氏は語った。壁画銀河鉄道の写真はあえてぼかしたと佐々木氏、そのまばゆい幻想的な写真は彼岸の子供たちを思わせた。

質疑応答では活発な発言が相次いだ。お二人の先につなげる気持ちに感動したとの感想。震災後書けなかったと作家が言うのを聞いたがお二人はという質問に、「短歌は五七五七七という定型があり肉体化されているから自然に出てきて、被災地では残してくれと頼まれている気がした」と佐藤氏。佐々木氏は「記録しておかねばと思い、被災地を撮り続けた。気持ちを変換させるのが写真の力」と語った。

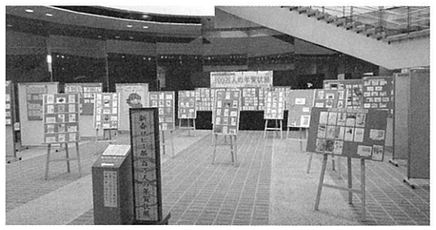


最近は震災を体験した若い世代から優れた人材が出てくるのではと、希望を抱くようになったと佐藤氏が語り、佐々木氏が頷いていた。

厳しい冷え込みをよそに、会場は熱い空気に満たされて文学講座を終了した。（近）

100万人の年賀状展終了

第17回を迎えた「100万人の年賀状展」が今年も開催された。700点を超える作品が1階エントランスロビーに展示され、多くの来場者で賑わっていた。保育園児から老齢者まで沢山の作品が並び、会場は、お正月のすがすがしく華やかな雰囲気。県内からはもちろんのこと、最近は、関東・関西方面などからも作品が寄せられるようになったという。

今年は干支亥年。イノシシが飛び出しそうな勢いを感じるものや、かわいいイノシシもあり、みていてあきない。貼り絵や絵手紙など、手法や素材もいろいろで、見所満載だった。絵本に登場する憧れの女性「ばばばーちゃん」が描かれた作品をみておもわずクスリ。また、松尾芭蕉様宛に書かれた賀状には「奥の細道はどうでしたか」とあり、こんな書き方も素敵だなと思えた。

あわせて、文学館に届いた多くの著名人の賀状も目にすることができた。こういう場だからこそのお目どおりだと思い、じっくりみて回った。（一）